

TDA 若手会員ミーティング



1月31日に東京の新宿区役所近くにあるマイ・スペース（貸し会議場）に於いて若手会員によるミーティングを行いました。その模様をレポートします。

まず、参加メンバーですが、パネリストとして、怡田勉氏、江草正博氏、大場麻美氏、豊方康人氏、中島あずさ氏、西田弘子氏、と私、中島良弘の7名が集まり、また、オブザーバーとして、わたなべひろこ理事長、田中秀穂常務理事、今野文雄理事にも参加して頂きました。

今回のミーティングは特にTDAの定期的、或いは年間行動計画に添って予定されていたミーティングではなく、普段、顔をあわせることはあってもTDAについて話し合うことがあまりなかった若手会員達が、率直な意見交換をしようとして集まった、あくまでも自発的なミーティングでした。主な発言内容を会議の流れに添ってレポートします。（敬称略）

「年々減少する会員」についての対策。

中島良：我々若手と呼ばれる会員達が、TDAの現在、或いは未来について語ることから、本当は逃げたいのではないかと、言う自分自身の反省を込めて今回の会議を進めて行きたいと思えます。年々減少する会員について、特に20代、30代の会員を増やすにはどうすれば良いか、また、企業内デザイナーはなぜ会員にならないのか、御意見を聞かせて下さい。

怡田：何人かの知り合いのデザイナーに「何故TDAに入らないのか。」と聞いたことがあるが、必ずと言って良い程「投資する時間とお金をかけるだけの価値があるのか。」という答えが帰ってくる。

中島良：実際はTDAに入らないかと誘われたりしたことのないデザイナーも多いのではないかと？

江草：企業のデザイナーが入らない理由として、大きくは3つある。まず1つは企業が賛助会員ならば企業の窓口として活動できるし、会費も企業が払ってくれる。2つめはTDAのメリットでもある会報誌（TDAニュース）等の情報が企業に入っていればほとんど手に入る。3つめはやはり仕事が忙しい。企業のTDAに対する認識は、あくまでもNIFが正式な団体であり、TDAはその外郭団体と思っている。自社の営業マンからすればTDAに対する理解はほとんど無い。

中島あ：自分が入った時はまだ自分の中に遊び心があったけれども、今はTDAに入る余裕がないのではないかと。以前、ジャパンクリエイションでTDAを紹介するブースを見に来てくれた人に、TDAの魅力が思い付かず積極的な勧誘が出来なかった。

大場：企業から社内デザイナーにTDAに個人的に入りなさい等と勧誘することは問題が多過ぎてあり得ない。

中島良：例えば自分の会社が賛助会員であっても、個人的に年会費を払って入会したいと思わせる何かTDAがあれば話は変わってくるが、まだそこまでの魅力がないのが現実。

豊方：フリーのデザイナーは企業のデザイナーがどのような考えで仕事をしているか興味があるし、また、情報交換をする上でも企業のデザイナーに入会して欲しい。

田中：TDAに入会するかどうかは会費の額の問題ではない。TDAが個人の会員に対してどのようなサービスを提供できるかが問題。それも目に見えるサービスでないと駄目。

わたなべ：自分がTDAに入った理由は、本当にこのままで日本のクリエイターの人材育成が大丈夫だろうか、或いは社会の中で我々の仕事が本当に認められているのだろうかと言った疑問があり、個人とはまた別の使命みたいなものがあった。若い人たちも将来の展望の中で、自分が会費を払って参加することによって、TDAが社会的なメリットを得、また自分にも跳ね返ってくると考えて欲しい。入会する人には「TDAに何をしてもらおう」と言うことを考えるだけでなく、「TDAで何が出来る」と言うことも考えて欲しい。

「魅力あるTDAにするには。」

中島あ：展覧会やイベントを企画する時、将来仕事に結びつく可能性があれば良いのに、と考えてしまうし、またそれがあればTDAのメリットになる。

田中：会員全員の展覧会をしたらどうか。また、将来会員の作品を集めたTDAショップを作ったらどうか。今TDAに必要なのは、そのような目に見える形での会員が興味を寄せる企画や発想だと思う。

西田：TDAは自己啓発の場である、と思う。TDAとは何か、或いは「志（こ

ろざし）」と言ったものをTDAニュースに掲載して、もっと会員にアピールするべき。その「志（核）」が固まらない以上はどんなことをやっても無駄。その「志」が決まった上で短期、中期、長期で目標を設定した方が良い。また、会員にアンケートを取ること必要。

わたなべ：TDAニュースに毎月、固定された協会からの発信ページを作り、また会員からの問題提起を受け付けるページを作ったらどうか。

田中：テキストスタイルと言うのは片方ではサイエンス或いはケミカルであり、また片方では文化人類学である。そのような見地からTDAニュースに教科書となるような部分が欲しい。

中島良：TDAニュースがもっと魅力的になると同じように、TDAのホームページももっと魅力あるものにする必要がある。ホームページをたまに見るが情報交換の掲示板や協会からの連絡掲示板等は全く機能していない。

豊方：今の会員が何を考えているか、皆で項目を考え早めにアンケートを採ってみてどうか。

大場：アンケートを採る場合、フリーのデザイナーにも企業のデザイナーにもあるいは教育関係に携わる人にも同じように問いかけられる質問が好ましいと思う。そうすれば会員共通の認識や問題点が浮かび上がってくるのではないかと。

怡田：テキストスタイルクリエイションの時、TDAニュースを貰っていく一般の人や異業種の人がかかりました。おそらくTDAに興味を持っている人はまだまだたくさんいると思う。

i TDAの将来について。

わたなべ：消費者に商品が手に届くまで責任が持てるテキストスタイルデザイナーというのが理想である。TDAがそのようなスペシャリストの集団を目指すと言うことをこれから打ち出して行きたい。

田中：TDAが会として全体の大きな方針を打ち出す中で、各会員は自分の得意な専門分野をもっとアピールして欲しい。そしてそれを今後のTDAの活動に結びつけていきたい。

大場：日本の企業にいて出来ないことは何かと考えた時、日本から世界に向けての発信、と言うものであり、それが出来ればTDAにとっても魅力を感じる。今野：今、日本のデザイナーの図案が世界の中で中国や韓国のもれよりも安くなければ売れなくなってしまったのは、日本の企業内デザイナーも認められていないということ。

中島良：これから世界に向けて情報を発信する為には、やはりTDAのホームページに英語のページを作る必要がある。

田中：テキストスタイルデザイナーの地位が未だ低い位置で見られている。商品を企画し、デザインして行くという方法論の中で、絵を描くデザイナーだけでもアーチストであって欲しい。そうすることによってテキストスタイルデザインと言うものが世間に認められ、またテキストスタイルデザイナーの地位も上がっていく。

わたなべ：ファッションショーの時でもテキストスタイルデザイナーがどんなに素晴らしい布を提供しても名前が消されるのはおかしい。テキストスタイルデザイナーとファッションデザイナーは同根でなければならない。そのことを広く社会に知ってもらえることは、個人では出来なくてもTDAだったら出来るはず。

田中：将来的にはTDAが日本のテキストスタイルデザイナーの為に、世界にむけて発信するショーやコンテストを独自に開催できるようにしなければならない。そうすることによってTDAが、そして日本のテキストスタイルデザイナーが社会的に認められる。

中島良：議論は未だ尽きませんが、残念ながら時間も来ました。今後もこのようなミーティングを継続して行くことが大切だと思います。参加者の皆さん、今日はどうも有り難うございました。

今回のミーティングは2時間と言う短い時間の中で、あっという間に過ぎて行きました。そして当然、結論が出ない問題も多々あり、議論すべきことはまだまだたくさん残ったままです。しかし、この会議に参加して私なりに1つだけ導き出した答えがあります。それはTDAが未だ草創期なのだ、ということ。つまり、会員みんなできちんと話し合い協力することによって、TDAはいかようにも姿を変え、また発展できる可能性を秘めている、ということ。そしてそのことはTDAの未来が、実は会員1人1人の「志」ひとつにかかっている、ということを示しています。（リポート 中島 良弘）